

『七月三日。今日の天気は晴れ。梅雨が明けた今日は各所で晴れ模様が見られ、洗濯物のよく乾く日となりました。今週一週間の予報を見えますと——』

「——で、お前はどうかんだよ。おい、震」

「え？ なに？」

「ぼうっとすんなよ。まさかもう酔ったの？」

「ごめん、ラジオ聴いてた。いい声だなんて思ってた」

「ラジオよりこっちの話聞いとけよ。なんか面白い話ないのかって」

「別に何も無いよ。やり甲斐も無いまま仕事してるし、生き甲斐も見付けられないまま生きてる」

「そういうのじゃなくてさ、せっかく集まったんだし思い出話しようぜ。な？ 何かあるだろ？」

「……思い出って」

『七月四日。今日の天気は晴れ。私は今、何となく屋上にいます——』

「そうそう、俺未だに分らないんだけどさ、一時期机にゴミ入れられてたんだけど、アレっていいじめ？」

「それアレじゃねえの？ 好きな人と付き合えるってやつ」

「何それ」

同級生の家で小さな同窓会をしている

ラジオ

主人公 皆が楽しそうに酒を飲む中、流れてきたラジオの天気予報に耳を傾けている

同級生 A

主人公

同級生 B

主人公

同級生 A

主人公

同級生 B

主人公

ヒロイン 過去のフラッシュバック

同級生 C

同級生 A

同級生 C

「好きな人の机に自分の名前を書いた紙入れて、しばらく見つからなかったら両想いになる、みたいなの。あったよな？」

「は？ 俺ろくに見ずに捨ててたんだけど」

「うわ、もったいねえ。付き合えてたかもしれないのに」

「それ高三の時の話だろ？ 運が良ければ結婚だってしてたかも」

「うわあー！ 早く結婚してえー！」

『さて、続いては大人気コーナー、恋のお悩み相談室です！ 今回もたくさんのお便りをありがとうございます！ お便りを読ませて頂いて、私も高校生に戻りたくなっちゃいました！ あゝ、タイムスリップとかできたらな〜』

「まあでも」

「学生時代の恋愛ってこういうもんだよ。どうせこの先の人生もずっと後悔し続けるんだろ？ この後悔が消えたらいいのになって思いながら」

「おい、震がやる気だぞ」

「いけいけ！ 全部飲め！」

同級生 A

同級生 B 頷く

同級生 C

同級生 A

同級生 B

同級生 C

主人公 三人が笑っている中、あまり話を聴かずに酒を飲み続ける

ラジオ

主人公 またラジオに耳を傾け、その内容に（「タイムスリップ」の部分強調するように）少し顔を顰める

同級生 C

主人公 同級生 C の言葉に、三人の会話に耳を傾ける

同級生 C

主人公 同級生 C の言葉に目を少し開かせ、グラスを持ち上げて一気飲みしようとする

同級生 C

同級生 A

「一気！一気！」

『後悔はきつと、全てを過去形にした人間の特権なのだと思う。だから、何も終わらせられない僕のこの感情は、きつと後悔ではない。じゃあ一体、この感情はなんなのか。未だに分からない。彼女を思い浮かべる度、彼女の声を思い出す度、僕はただひたすらに、どうしようもなく』

『どうしようもなく、泣きたくなる』

* * * * *

『昨日ありがとう』

『久々に楽しかった』

『俺も楽しかった。また集まろうぜ』

『二日酔いお大事に』

『あのさ、昨日高校時代の話したじゃん』

『卒業生って中に入れたりしないかな』

『覚えてないのかよ。老朽化とかで高校の住所は移動しただろ。その校舎自体はもう使われてないぞ』

『犯罪者になってもいいなら入れるかも、なんてな』

『……入らないよな？』

同級生B

同級生三人がはやし立てる 声が少しずつ遠くなっていく

主人公 ナレーション

主人公 中身を呷ったグラスを机に強く叩き付ける その瞬間に暗転
主人公 ナレーション 画面は暗いまま

* * * * *

次の日 携帯の画面

主人公 メッセージ

主人公 メッセージ

同級生C メッセージ

同級生C メッセージ

主人公 同級生Cのメッセージを確認し、気持ち悪そうな顔をしながら携帯をしまおうとする。が、少し考えるような表情を見せた後、もう一度同級生にメッセージを送る。

主人公 メッセージ

主人公 メッセージ

同級生C メッセージ

同級生C メッセージ

同級生C メッセージ

『七月四日、今日の天気は晴れ。観測図から梅雨前線が消え、日本全土での夏入りとなりました。日焼け対策をし、熱中症には充分お気を付けてください。また、明日からは急激に気温が――』

「三月九日、今日の天気は晴れ。卒業式の後で教室にいたら、いつの間にか学校から人が消えていました。さすがの私でも違和感を覚えてます。しかもなんか蒸し暑いし。意味が分かりません。とりあえず家に帰って――」

「……朱音（あやね）」

「……震？」

* * * * *

主人公 同級生Cのメッセージを確認する
が返信しない ポケットからイヤホンを取り出しラジオを聴く

ラジオ

ラジオの音声を流しながら、夏の風景を映していく 時間経過が分かる

主人公 学校の前に到着し、少し周囲を見渡した後で学校に忍び込む

主人公 学校を歩く 時々高校時代の自分を映して過去と重ねるようにしてもいいかもしれない

主人公 歩いているうち、とある教室に辿り着く そこから声が聞こえてくる

ヒロイン

主人公 不思議そうな、驚いたような顔を見せ、少し迷った末に扉を開ける

主人公 ヒロインと目が合う

主人公

ヒロイン

* * * * *

高校時代

主人公 暑がりながら屋上に行く 扉を開

「七月四日。今日の天気は晴れ。私は今、何となく屋上にいます。とにかく暑い。屋上なら少しはマシかなと思って来てみたのになんとも涼しくありません。なんなら校舎より暑い気がする——」

「……なに？」

「いや、何してるのかなって思っ」

「何って、見れば分かるでしょ。録音」

「それは分かるけどさ」

「君（あんた？）こそ屋上まで何しに来たの？ ここ立ち入り禁止だよ？」

「ここなら風が吹いて少しは涼しいかなって思っ」

「残念だけど期待外れ。全然」

「そうみたいだね。聞こえてたよ」

「聴いてたの？ 趣味悪いよ」

「聴いてたんじゃなくて聞こえてたんだっ」

「同じじゃん」

「君、名前は？」

「……震。なんで？」

「盗聴犯の名前くらいは覚えておこうと思っ。あ、私は朱音。忘れないでね」

けようとすると声が聞こえる

ヒロイン

主人公 扉を開ける ボイスレコーダーで録音している座り込んだヒロインと目が合う
う しばらく見つめ合う

ヒロイン

主人公 少し慌てたように

ヒロイン 手元のボイスレコーダーを見せながら

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン 首を横に振りながら

主人公 歩きながら

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公 柵にもたれかかる

ヒロイン 暇そうにする

しばらく無言の時間が続く

ヒロイン

主人公 訝しんで

ヒロイン

主人公 顔を顰める

「何を録音してたの？」

「その日あった事とか。何も無い日だったら『何も無い一日でした』で終わりだし」

「何の為に？」

「意味なんか無い。日記と同じだよ」

「じゃあ日記でいいじゃん」

「ごちゃごちゃうるさいなあ」

「あのね、世の中の全てに理由とか意味があると想ったら大間違いだよ。人間が生まれてくるのに理由も意味も無いのと一緒。私が自分の声を録音してる事に何かを見出そうとするだけ無駄。これだけは忘れないで。分かった？」

「よし。じゃあ私は戻るから。君も早く戻りなよ」

「あ、うん」

「あ、そうそう」

「『何も無い一日でした』って録音するのにはもう飽きてるの。何か面白い事があったら教えてね。これも忘れないで」

* * * *

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン

ヒロイン 立ち上がる

ヒロイン 諭すように

主人公 少し押されるように頷く

ヒロイン 満足そうに

主人公 呆気にとられるように

ヒロイン おもむろに立ち去ろうとする

ヒロイン 振り向く

ヒロイン

ヒロイン 小さく手を振りながら前を向き、

屋上から出て行く

扉を閉めるタイミングで場面転換

* * * *

現在

主人公 場面転換と同じタイミングで教室の扉を閉める ヒロインとしばらく見つめ合う

「……君、誰？」

「そっちこそ誰？ 震？ なんか老けた？」

『あゝ、タイムスリップとかできたらな〜』

「僕らが出会った日にちと場所、言える？
あと、どんな出会い方だったか」

「何で」

「いいから」

「えっと七月四日、屋上。盗み聞きがどうと
かって話した。いや、貴方が震だと仮定した
上だけでど」

「一応本当みたいだね。納得するしかなさ
そうだ」

「ちょっと待ってよ、私はしてないんだけ
ど。本当に震なの？」

「まあ」

「まあって何よまあって。なんか証明して
よ」

「証明って……」

「……君の名前は、朱音だ」

「なに今更」

「君が言ったんだろ。朱音って名前を、忘
れるなって」

ヒロイン 驚いた様子で主人公を見る

主人公

ヒロイン

主人公 狼狽える 顔を顰める

ラジオ 過去の回想

主人公 ハツとしてもう一度ヒロインの顔
を見る

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン 少しむっとしたような表情をす
る

ヒロイン

主人公 一応は納得したような顔をする

主人公

ヒロイン 慌てたように

主人公

ヒロイン 怪しむように

主人公

主人公 しばらく悩むような様子を見せた
後、何かを思い出したような表情をする

主人公

ヒロイン 眉を寄せて

主人公

ヒロイン 主人公の言葉に少し驚くような

「じゃあ本当に震だとして、老けてる理由は？ あと急に暑くなった理由。まさかタイム」

「タイムスリップだろうね。理由は知らないけど」

「本気？」

「なにこれ」

『……やっぱり十年前と言えばあれです。ノストラダムス、じゃなくて、えっと、忘れちゃいました。でもほら、地球滅亡説があったじゃないですか。『2012』なんてSF映画もあったくらいですよ。私もどうせ地球が終わるなら宿題とかしなくていいやっと思っただけじゃなくちゃ学校始まるっついうね』

「……マジ？」

「えっと、どうする？」

「どうするって、私に訊かれても」

「……ごめん、言い方を間違えた。君はどうしたい？ 十年前に戻りたい？」

「まあ、ここにいてもしょうがないし、戻らないといけないよね」

様子を見せた後、納得したように息を吐く

ヒロイン

主人公 ヒロインの言葉を遮って

ヒロイン 顔を顰める

ヒロイン 呆れるように笑いながら

主人公 スマホを取り出し日付を見せる

ヒロイン それをしばらく呆然と眺める

ヒロイン

主人公 大きく息を吸い込んで溜め息を吐く

く

主人公 スマホでラジオを聴かせる

ラジオ

ヒロイン

主人公 頷く

主人公 ヒロイン しばらく無言

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン しばらく考える

ヒロイン

「じゃあ戻る方法を考えよう」

「どうやって?」

「それが分からないから考えようって言うてるんだよ」

「とりあえず、ここに来るまでの事を教えてよ。卒業式の後だっけ?」

「もしかして覚えてない? 卒業式の後、私達――」

* * * * *

「三月九日、今日の天気は晴れ。言わずもがな卒業式の日です。ずっと立ちっぱなしで足腰が痛い。疲れた。震もしんどそうにします」

「してない」

「ちよっと邪魔しないでよ。……えっと、なんだっけ。忘れた。もういいや」

「最後の日なのにそんな適当でいいの?」

「疲れたって言ったでしょ。もう録音する気力も無いの」

「もったいない」

「……もうこれで終わりなんだね」

「そうだね楽しかった?」

「何が」

「学校生活っていうか、人生って言うか。ほら、何も無い一日には飽きたって、君が言

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン 少しむっとした顔つきをする

主人公

ヒロイン 頷く

ヒロイン

* * * * *

高校時代 教室

主人公 なんとなく外を眺めている

ヒロイン 録音している

主人公

ヒロイン

ヒロイン ボイスレコーダーをしまう

主人公

ヒロイン 欠伸交じりに

主人公

主人公 ヒロイン しばらく無言

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公

ってただろ」

「……よくそんな事覚えてるね」

「忘れるなって言ったのは君だ」

「そうだったけ」

「空は飛べなかったし、世界は終わらなかつた。けどまあ、それなりに楽しかったよ」

「……僕も程々に楽しかったよ」

「ふーん」

「……じゃあ、僕はそろそろ帰ろうかな」

「うん」

「君はどうする？」

「私はもう少しここにいるよ。少し眠って帰ろうかな」

「そっか」

「ねえ」

「え？」

「えっと、これも忘れないで欲しいんだけどさ。その、私」

「いや何でもない」

「なんだよ」

「何でもないってば。眠たくて忘れちゃった」

「そう」

「えっと、じゃあ」

「……うん。じゃあね、震」

「さよなら。朱音」

ヒロイン

主人公

ヒロイン 笑いながら

ヒロイン 少し考えて

ヒロイン 呟く

主人公

ヒロイン

主人公 ヒロイン しばらく無言

主人公 立ち上がりながら

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公

主人公 教室出入口へ向かう

ヒロイン 立ち上がって

主人公 ヒロインの方を振り返って

ヒロイン どもりながら

主人公 ヒロインと見つめ合ってしばらく

無言

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公

主人公 ヒロイン 一瞬無言

主人公

ヒロイン

主人公

* * * * *

「……それで、目が覚めたらって感じで」

「ああ、そう言えばそうだったかも」

「え？ どういう意味？」

「あ、いや、あの後もう一回教室に戻ったら、君が机に突っ伏して寝てたから。こんな感じで」

「そう、なんだ」

「……どうしたの？」

「いや、えっと、どうして教室に戻ろうとしたのかなって、思ったり」

「……それは、えっと、……ごめん、十年前の事だからさすがに忘れちゃった」

「ふーん」

「それで、どう？」

「え？」

「何か、十年前に戻れそうな手掛かりになった？」

「……まあ、それだけじゃさすがに難しいかな」

「だよね」

* * * * *

主人公 教室を出る
主人公 しばらく廊下を歩き、道中で頂垂れる。その後で、意を決したように教室に戻る

主人公 教室の中で、机に突っ伏して寝ているヒロインを見つける。それを見て少し迷った後、何も言わずにそのまま帰る

現在 教室

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公 十年前のヒロインの真似をする

ヒロイン 驚いたように

主人公

ヒロイン

主人公 何かを隠すように

ヒロイン

主人公 ヒロイン しばらく無言

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公 少し考える

「とりあえず、学校周ってみない？」

「え？　なんで？」

「それこそ手掛かりがあるかもしれないし、何か思い出すかも」

「まあ、ここにいても仕方ないしね」

「震は今何してるの？　仕事とか」

「別に、普通の会社員だよ」

「それだけ？」

「それだけって、それ以外に何て言えばいいか」

「ふーん。じゃあ私、は……」

「……え？」

「……いや、やっぱりいい。聴いていいのかわからない」

「……そうだね。聴かないでもいいかも」

「こうやって学校歩いてると、やっぱり懐かしいって思うの？」

「うん、まあ」

「煮え切らない返事。なに？」

「いや、僕が懐かしいって思うのは学校そのものじゃなくて、君と一緒にいた時間だから」

「……そっか。そうだよね」

「私にとってはついさっきの事なのに、君にとってはもう思い出になるんだよね」

「どうだろう。僕もまだ――」

「……まだ、何？」

「……いや、何でもない」

主人公

ヒロイン

主人公 教室の出入口に向かいながら

ヒロイン 主人公に付いて行く

主人公 ヒロイン 廊下に出る

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン 段々と声が小さくなりながら

主人公

ヒロイン

主人公

主人公 ヒロイン しばらく無言

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン 少し悲しそうに呟く

主人公 ヒロイン 一瞬の間

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公

主人公 ヒロイン しばらく廊下を歩く

「どうしたの？」

「……私がどうなってるのかって君の口から聴けないのは、怖いからなんだ。私はどこにいるのか、何をしてるのか。今の私を感じてるこの焦燥感から抜け出して、私はちゃんと外に飛び出せているのか」

「覚えてるかな？　ここで君と話した日の事――」

* * * * *

「八月九日。今日の天気は曇り。窓からなんとなく曇り空を眺めています。気温は高いのに湿度は高くてイライラします。あ、鳥が飛んでる。なんかイライラします。えっと、あとあれです。今日も何も無い一日でした」

「何を鳥にイラついてんの」

「だって、鳥ってなんかムカつくじゃん」

「どこが」

「空飛んでるところとか」

「は？」

「私は、どこか遠くに行きたい。ここじゃないうんと遠くに。分厚い雲の切れ目でもいい。青く澄んだ夏空の向こうでもいい。訳も

ヒロイン 途中で立ち止まる

主人公

ヒロイン 窓の方へと向かいながら

主人公 ヒロインが見ている窓から同じよ

うに外を見る 窓枠に近付き、ヒロインと

並ぶ

ヒロイン

* * * * *

高校時代 同じ場所

ヒロイン 録音している

ヒロイン ボイスレコーダーをしまつて暑

そうにする

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン 項垂れるように息を吐く

ヒロイン

分らないような柵も焦燥も全部取っ払って、早く自由になりたい。鳥みたいに、空を飛んでみたい」

「……その気持ちは、よく分かる。多分、僕もそうだから」

「君は、いつも何か面白い事を探してる。

『何も無い一日』に飽き飽きしてる」

「なに、急に」

「鳥になって空を飛べたら面白いのかな」

「……どういう意味？」

「僕は鳥を見る度、少し悲しくなるんだ。僕らがこの小さな世界から抜け出したいように、鳥もどこにも行けないまま、存在しない出口を探し続けてるんじゃないかって。僕らが世界中のどこに行けるようになったところで、この気持ちは変わらないだろうなって思う。だって、僕はどこまで行っても僕だから。自分以外の、誰かになりたい」

「……でも私は、やっぱり鳥になりたい」

「どうして？」

「だって、君は絶対君のままだもん。どこに行こうと、何になろうと。君はどうしようもなく変わらないまま」

「だから、私は鳥になりたい。大空を飛べるようになれば、また君を見付けられる。君がこの世界にいる限り、君を探し出す。これだけは忘れないで」

主人公

主人公 ヒロイン しばらく無言

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公

主人公 ヒロイン しばらく無言

ヒロイン

主人公

ヒロイン

ヒロイン 主人公の方を見る

ヒロイン

ヒロイン 廊下を歩き出す

主人公 それに付いて行く

「君って何かと『これだけは忘れないで』って言う癖があるよね」

「そう？ 自分じゃ気付かない」

「そのせいで僕は覚えてなきやいけない事が増えるわけだけど」

「忘れられるのは悲しいから。せめて、君には覚えてて欲しいんだ」

「日記みたいにボイスレコーダーで録音してるのも、忘れないように？」

「そうかもしれない」

「分かった。じゃあ、僕は全部忘れない。ちゃんと覚えておくよ」

「約束だからね」

* * * * *

「約束しただろ、忘れないって。全部覚えるよ」

「君にとってはつい最近の事が、僕にとっては十年前の出来事だけ。それでも、覚えている。君が忘れて欲しくなかった事も、ボイスレコーダーに録音した事も。何も忘れなくなかったから」

「じゃあ君がその約束を忘れてないか、テストしよう」

「なにそれ」

「これから学校を周って、そこで私達が何

をしたか、何を話したか、何を録音したか。

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公 ヒロイン しばらく無言

主人公

ヒロイン 少しだけ口角を上げるように微笑む

ヒロイン

* * * * *

現在

主人公

ヒロイン 少し驚くように目を開く

主人公

ヒロイン 静かに微笑む

ヒロイン

主人公

ヒロイン セリフの最後で走り出す

をしたか、何を話したか、何を録音したか。君に全部話してもらおう。それを私が答え合わせする。ほら、行くよ」

「別にいいけど、そんな事して何になるの？」

「言ったでしょ。世の中の全てに理由とか意味があると思ったら大間違いだつて」

『彼女は、「私はどうなってる？」と訊きたかったのだと思う。あるいは、「私と君はどうなってる？」と。僕がそれに対して「聴かないでもいいかも」と言ったのは、彼女の質問に答えられる自信が無かったからだ。だって、今の僕はもう、彼女と一緒にはいない。どこに行こうと何になろうと、僕を見つけない。そう言ってくれた彼女はいない。十年前の彼女と同じように、僕は今、鳥になりたかった。どれだけの時間をかけても、きっと世界のどこかにいる彼女を見つけ出したかった。なのに、僕はどこにも行けないまま、何者にもなれないまま。翼なんか無い。ただ、どうしようもないような現実が目の前にあるだけ。変わらないものなんて無いという、そんな当たり前が、僕を酷く苦しめる。もう消える事のない何かを抱きしめたまま、あの頃のままの彼女と、あの時の答え合わせをする。こんな事に、意味も理由も無いのに。あの頃の僕は、意味も理由も無い時間を愛おしく思えたのに。楽しそうな彼女を見る度、僕はただ苦しくなった。僕と彼女がどんな風になろうと、もう僕と彼女の道

主人公 一瞬だけ呆気に取られる

主人公 慌てて追いかけている

ヒロイン 笑いながら

場面転換

主人公 ナレーション

主人公とヒロインが学校を周っている様子を映しながら

は交わらないのに。この瞬間がこの先、彼女をどれだけ苦しめるだろう。そう思う』

「震」

「……なに？」

「楽しいね」

『いや、違う。僕は彼女に苦しんで欲しかった。今も苦しんでいると思いたかった。僕だけが、後悔にすらなり切れない感情を抱いているなんて、許せなかった。何も終わらせられないのが僕だけだなんて、思いたくなかった。思い出す度に泣きたくなるような朱音が、目の前にいる。この場所に閉じ込められたいと願った。それ以外は何もいらなかった。もうどこにも行かないでくれと言ってしまったかった。なのに今この瞬間も、僕と同じように年を取った朱音がどこかにいるかもしれない。僕を探しているかもしれない。僕を待っているかもしれない。ありえないけど、一度そう思ってしまうと焦ってしまう。過去形なんかじゃなかった。終わらせられなかった。何も思い出になんかできなかった。彼女の姿も、歩き方も、指先も、瞳も、流れる髪も、靴先も、その声も。何も忘れたくなかった。ただひたすらに、切実に、彼女の事が』

「十年前に戻る手がかりを探す、なんて、ただの口実だって分かっているんだ。私はただ、君と一緒にいたい。それだけなのにね」

「……あ」

「なに？」

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公 ナレーション

主人公とヒロインが学校を周っている様子を映しながら

主人公 ヒロイン 廊下を歩く

ヒロイン 悲しそうに笑いながら

元の教室の前

主人公

ヒロイン

「いや、ちょっと思い出した事があって」

* * * * *

主人公 教室の扉を開ける

* * * * *

高校時代 教室

主人公 教室の扉を開けると、ヒロインが何かを隠すように、驚いたようにびくりと
してこちらを見る。

主人公

「……何してたの？」

ヒロイン

「いや、別に」

主人公 少し怪しむ そのまま自分の席に

「……そう」

向かう

ヒロイン 主人公をなんとなく目で追う

主人公

「……なんだよ」

ヒロイン

「いや、別に」

ヒロイン どこかよそよそしい

主人公

「今日は録音しないの？」

ヒロイン

「え？ あ、そうだった忘れてた」

ヒロイン ボイスレコーダーを取り出す

ヒロイン

「八月三十一日、今日の天気は晴れ。えっと、何も無い一日でした」

ヒロイン ボイスレコーダーをしまう

主人公

「え？ それだけ？」

ヒロイン

「別にいいじゃん」

主人公

「せっかく夏の終わりなんだから、もっとなんかあるんじゃないのかなって」

ヒロイン

主人公

「あっそ」

主人公 ヒロイン しばらく無言

ヒロイン

主人公

「震はさ、今年世界が終わるかも、みたいな話知ってる？」

主人公

「あー、なんとなく。『2012』って映画も

あるよね」

「震はあれ信じる？」

「信じるっていうか、信じたいっていうか、本当に終わるといいなって思う」

「どうして？」

「理由は沢山あるけど、なんか、色々と楽になりそうだからかな。朱音は？」

「私は、世界の終わりってどんな光景なのか知りたい。綺麗な景色だといいなって思う」

「分かる。隕石とか降ってきて欲しい」

「……世界が終われば、私も変えられるかな」

「……どういう意味？」

「八月三十一日、今日の天気は晴れ。夏の終わりの空はとても綺麗です。世界の終わりもこんな風だといいなって思います。夏の終わりは世界の終わり、なんて、とても甘美な言葉です。早くそうなってくればいいのに。何も無い一日も、飽きるような毎日も、全部全部ぶっ壊れればいいのに。世界の終わり以上に面白い事なんて絶対に無いのに」

「私達は、私と君だけは、どこの誰よりも世界の終わりを望むような人間で居続けよう。絶対に。これだけは忘れないで」

「……そうだね」

* * * * *

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公 少し笑いながら

主人公 ヒロイン 窓の外に目をやる

ヒロイン 呟くように

主人公

ヒロイン ボイスレコーダーを取り出す

ヒロイン ボイスレコーダーをしまう

ヒロイン

主人公

* * * * *

「あの時、教室で何してたの？」

「あの時って？」

「八月三十一日。僕が教室に入った時、何か隠してたでしょ？」

「いや、別に」

「もういいんじゃない？ 今更」

「今更って、君にとってはそうかもしれないけど、私にとっては過去形じゃないんだから」

「……僕だってまだ、何も」

「ごめん、ちょっと電話」

現在

主人公 ヒロイン 自分の席に座っている

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公

主人公の電話が鳴る 画面を見ると、同級生Cとある

主人公

主人公 教室を出て行く

ヒロイン 教室に一人残される

ヒロイン 慎重に主人公の席に座り、机に手を入れる 折り畳まれた紙を取り出した後、少し考えてそれに文字を書き加える
主人公の方に場面転換 同級生Cと電話をしている

主人公

同級生C

主人公

同級生C

『そうそう、お前飲み過ぎて二日酔いでフラフラ入って行ったんじゃないかとか』

「大丈夫だから。二日酔いも平気」

『びっくりしたよほんと、急に一気飲みとかするから。らしくない』

「だってあれはお前が」

主人公

『学生時代の恋愛ってこういうもんだよ。どうせこの先の人生もずっと後悔し続けるんだろ？』

「……お前が」

『この後悔が消えたらいいのに、って思いながら』

『あゝ、タイムスリップとかできたらな』

『……俺が、何だよ』

「……何でもない。もう切る」

『は？』

「震ってさ、後悔とかした事ある？」

「僕は別に——」

「……いや、分からない。あれが後悔なのかどうかも」

「私はね、たった一つだけ後悔してる事があるの」

「言おうか迷ったんだけど、私——」

* * * * *

同級生C 過去の回想

主人公

同級生C 過去の回想

ラジオ 過去の回想

同級生C

主人公

同級生C

主人公 電話を切る

主人公 教室に戻る ヒロインが自分の席に座っている

主人公 自分の席に座る

ヒロイン

主人公

主人公 廊下から机に突っ伏して寝ている
ヒロインを見る自分がフラッシュバックする

主人公

主人公 ヒロイン 一瞬の間

ヒロイン

主人公 ヒロインの方を見る
ヒロイン

* * * * *

「ねえ」

「え？」

「えっと、これも忘れないで欲しいんだけどさ。その、私、……いや何でもない」

「なんだよ」

「何でもないってば。眠たくて忘れちゃった」

「そう」

「えっと、じゃあ」

「……うん。じゃあね、震」

「さよなら。朱音」

『三月九日、今日の天気は晴れ。二度目の録音です。……言えなかった。今日しかなかったのに。今日じゃなきや駄目だったのに。私が今までに伝えた事、何を忘れてもいい。だけど、私の事だけは、忘れないで欲しい。私もこの先、君の事だけは何があっても忘れないからって。そういう風に言いたかったのに。私は、震が——』

* * * * *

「あの日、寝てたんじゃなくて泣いてたの」

「……どうして」

「この後悔が消えたらいいのって思った。」

過去の回想 卒業式の後 ヒロイン視点

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公

ヒロイン

主人公 教室を出て行く

ヒロイン ボイスレコーダーを取り出す

ヒロイン

ヒロイン 机に突っ伏して静かに泣き出す
主人公 廊下からヒロインを見て戻っていく

* * * * *

現在

ヒロイン

主人公

ヒロイン

今すぐに時間が戻ればいいのになって。まさか、逆に時間が進むとは思わなかったけど」

「ねえ、震が教室に戻ってきたのってどうして？ 私が起きてるって知ってたらどうするつもりだったの？ それとも、それすらもう、君の中では思い出なの？」

「違う。思い出なんか一つも無い。過去形にした事なんて一つも無い。後悔なんか一つも無い。だって、あの時言えなかった言葉も、今この瞬間になら君に言えるんだから」

「……じゃあ言ってよ」

「……言えない。それを言うのは、言うべきなのは、君だから。君がその後悔を消さない限り、多分君は戻れない」

「……別に、消さなくてもいいって思っちゃうんだ。このままここにいてもいいかなって思っちゃうんだ。だって、また君に会えたんだから」

「でも、やっぱり駄目だね。このままだと私は、十年後に君と一緒に笑えない。変わらず君といられるように、変わらなきゃいけないんだ」

「十年後の七月四日。今日の天気は晴れ。数分前伝えられなかった言葉を、十年越しの君に伝えます。何も無い一日でよかった。意味も理由も何も無い世界でよかった。私はただ、君と一緒にいられれば、それ以外は

主人公 ヒロイン 一瞬の間

ヒロイン

主人公 強く断言するように

ヒロイン

主人公

主人公 ヒロイン 一瞬の間

ヒロイン

ヒロイン ボイスレコーダーを取り出す

ヒロイン

ヒロイン ボイスレコーダーのスイッチを

押す

ヒロイン

何もいらなかった。震、忘れないで。私は、君がずっと好きです。他の何を忘れても、これだけは忘れないで。……またね」

「……そんなの、僕だって同じなのに。僕だってそうそう思いたいのに」

『七月四日。今日の天気は晴れ。私は今、何となく屋上にいます。とにかく暑い。屋上なら少しはマシかなと思って——』『七月十日。今日の天気は雨。珍しく土砂降りの日です。急な雨で傘を忘れました。とことん最悪の一日です——』『八月九日。今日の天気は曇り。窓からなんとなく曇り空を眺めています。気温は高くないのに湿度は高くてイライラします。あ、鳥が飛んでる。なんかイライラします——』『八月一日、今日の天気は晴れ。夏が始まりました。蝉がうるさく鳴いています。二か月の命に——』『八月三十一日、今日の天気は晴れ。夏の終わりの空はとても綺麗です。世界の終わりもこんな風だといいなって思います。夏の終わりは世界の終わり——』『十一月三日、今日の天気は雪。そうです、雪が降りました。震に雪玉をぶつ

ヒロイン ボイスレコーダーのスイッチを切る

主人公 隣を見るとヒロインがいなくなっている

主人公

主人公 腹立たしくなって机を蹴る 机が倒れ、中から折り畳まれた紙が出てくる 不思議に思いながら開けてみると、そこに「朱音 十年後、始まりの場所でまた君と会えますように」と書かれている

主人公 それを読み、教室を飛び出す

ヒロインの過去のフラッシュバック

主人公が屋上に向かって走る様子を映しながら

けたらマジで怒ってました——』『十二月二十四日。今日の天気は晴れ。どこもかしこもイルミネーションだらけです。クリスマスなんて——』『二月九日、今日の天気は曇り。卒業式まで一か月を切りました。もう私達が高校生でいられる時間も——』『三月九日、今日の天気は晴れ。言わずもがな卒業式の日です。ずっと立ちっぱなしで足腰が痛い。疲れた。震もしんどそうにしています——』『三月九日、今日の天気は晴れ。卒業式の後で教室にいたら、いつの間にか学校から人が消えていました。さすがの私でも違和感を——』『十年後の七月四日。今日の天気は晴れ。数分前伝えられなかった言葉を、十年越しの君に伝えます——』『震、忘れないで。私は、君がずっと好きです。他の何を忘れても、これだけは忘れないで。……またね』

『七月四日。今日の天気は晴れ。今私は、なんとなく屋上にいます。もう廃校になってしまった私の母校です。ふと、十年前の不思議な出来事を思い出しました。卒業式の後、私は十年後にタイムスリップしたのです。つまり丁度今、どこかに十年前の私がいるかもしれません。あるいはもう十年前に戻った頃でしょうか。もう断片的にしか思い

主人公 屋上に辿り着き扉を開ける。しばらく周りを見渡すが誰もいない

主人公 十年前ヒロインと会話をした場所と同じところに立つ ヒロインがいた場所にボイスレコーダーが落ちていて それを拾い上げ再生ボタンを押す

ヒロイン

今までの風景とか何かいい感じの映しながら

出せません。全てはただの思い出になってしまいました。あの頃の私は、あまりに愚直で未熟な恋をしていました。何も無い人生に訪れた彼の存在を、今になってふと思います。私と彼の二人なら、この世界のどこへだって飛べるのだと疑っていません。どこにしよう、何になろうと、番のように二人でいられると思っていた。例え世界の終わりが来ようと、その最後の瞬間まで共にいられると祈っていた。例え世界が終わるとしてもその瞬間、私はようやく全てを手に入れられると思った。愛の証明とか、心の場所とか、言葉の輪郭とか。そういう、いくら考えてもしょうがないようなものの答えが分かると思っただろう。どうしようもなく救われない世界で、私と彼だけが救われると思っただ。たかが世界の終わりと言えてしまうくらい、彼と共にいたかった。意味も理由もいらないと、昔彼に伝えました。私が今、ここに立っている事にもやっぱり意味も理由もありません。ふと、過去形になったあの日々を思い出したから。それくらい理由でいいのです。十年前、机の中に私の想いの丈を記した手紙を入れました。あれを彼が読んだのかどうか、私には分かりません。ですが、彼がここにいないという事はそういう事なのでしょう。十年前に出会った彼は、今もこの世界のどこかで生きている彼は、もう変わってしまった。多分、私も同じです。変わらないものなんて無いという、当たり前前の事実があるだけです。あるいは、少し時間を置いて彼はここにやってくるのです。

ようか。それは嫌だなと少し思います。もう彼にはここに来ないで欲しい。十年前の私を見送った後で、悪い夢を見たようだと思いながらここを去って欲しい。もう、全てを終わらせてさよならして欲しい。強く、そう思います。何も無い人生でも、ただ彼がいればそれだけでよかった。何を忘れても、私の事だけは忘れないで欲しかった。十年後、始まりのこの場所で君と会いたいと願った。全ては過去形になりました。私も君も変わりました。懐かしい思い出になりました。私はもう、彼に会いたいとは思いません。これが最後です。彼に伝えたい言葉を、誰にも伝わらない記録としてここに残します。ねえ、震。君の事を思い出す度、泣きたくなるくらい、悲しくなるくらい、私はただ、君が好きでした。私はもう、君を忘れます。だから君も、私の事だけはどうか』

『どうか、忘れてください』

画面暗転

ヒロイン

(裏話

序盤のラジオのアナウンサーと、十年後のヒロインは同じ方に声を担当していただこうと考えていました)